

# まんたら通信

第216号 (通巻251号)

平成26年06月 西暦2014年 佛暦2580年 皇紀2674年

安房国八十八ヶ所 第一番札所  
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org

白浜中学校下の海岸に群生するハマヒルガオ 2008/5/5  
年によって多い時、少ない時があります



## 惚け封じのお薬

日本では、痴呆症の人が八百万人、徘徊が原因で行方不明になる人は、全国で毎年一万人だそうです。昔も『ぼけ』や『耄碌』という言葉はありましたが、そういう人を見た覚えがありません。あの頃は寿命が短かかったからと言う人がいますが、長生き村で全国に有名だったこの町では、八十歳以上で、曲がった腰にカゴを背負い、田畑で働くお年寄りも沢山いました。その証拠に、お寺の過去帳には八十歳以上という、ご長命のお年寄りが沢山載っています。私とて九月五日には八十歳になります。つまり、いつおかしくなっても不思議ではない年齢ですから、他人事ではありませ

ん。では、惚けない秘訣つてあるのでしょうか。あの頃、この土地の大抵の家庭では、跡取りは、船員、旋盤工、大工、左官、マグロ船の漁師さんや潜りさんとして出稼ぎに行き、若い奥さんは地元にて、子供を育てながら年寄りと暮らしていました。お年寄りは、それまでの人生経験から、世の中のことに豊かな知識を蓄えていますから、「言うことが遅れてる」などと言われながらも、年寄りというだけで家の中は勿論、地域でも一目置かれる『一番偉い人』でした。

方言や関東大震災その他、昔の話、家や地域の歴史、人さまとのつきあい方、食事の作法などあれこれの躰げや、場面にふさわしい言葉遣い、仏さま神様を敬う気持ちなど。まだまだあるでしょうが、このようなことは、年寄りだから出来る大きな役割ですね。つまり年寄りは、家の中でも世間から「あてにされていた」ということとすし、その役目は今でもとても大事なことだと、私は思っています。キリスト教の大学を卒業した、カトリック教徒で作家の曾野綾子さんは、八十歳をとうに越していると思えますが、最近の産経新聞に『老いても毎日働く効用』と題する文章を書いています。

「いつ会えなくなっても不思議でない歳だから」と、昔からの友達に会うために、北海道の修道院を訪ねた時のお話です。余程のことがない限り外の世界と関係を持たず、自給自足の生活を送っている人たちがいるところ、それが修道院ですね。

曾野さんの同級生たちですから当然ですが、二ヶ所訪ねた修道院の修道女の年齢は、どなたも八十歳以上だそうなんです。「皆さんは車いすの人もいないし、惚けてもいないのは何故でしょう。」という曾野さんの問いに「良くは分からないけれど、みんなが順番に食事を作り、修道院の庭のさやかな畑で野菜を作り、花壇を世話しているせいかもしれませんね。」という返事だったそうです。

以前にも書いたことですが、昔、ヨーロッパの田舎町の、道路際に住む老婆は、夜になると窓際にロウソクをともし、イスに腰掛け、家の外の暗い道をじつと見ていたそうです。不思議に思った人が、毎晩ロウソクをともすのは何故ですかと尋ねると「一日中歩き続けて疲れた旅人が通りかかった時に、この明かりを見て、ほっと温かい気持ちになつてくれればいいと思つて、こうしているのです」と答えたという話です。館山の女性更生施設『かにた婦人の村』は、数十人の女性が暮らしています。ここは、毎日、山のように全国から送られてくる、衣料や装身具、靴など、ありとあらゆるリサイクル品を仕分けしする人、みんなの食事を作る係り、陶器を焼いたり、以前は乳牛もいましたし田んぼも作っていました。このような作業班ごとに役割を決めて、ささやかですがお給料も受け取っています。皆さんお年寄りが多いのですが、不思議に惚けたということ聞きません。

それはきつと、「誰かの役に立っている。あてにされている」という気持ちが張り合っているからではないかと思えます。この歳になると何もすることがなくて、などと勿体ないことを考えず、仏さまに預かった折角の命を、最後まで使い切りたいと、私は思っています。



情も温かかった、ということです。私が憶えている『堂のおっさん』は、毛利の石屋さんが石塔まで建ててくれました。▼今月の野草はミヤコグサ【マメ科ミヤコグサ属】です。道端や明るい草地に群がって咲く多年草で、草丈は15~20センチ。5月の連休の頃から、秋まで咲き続けます。本来は明るいレモン色ですが、オレンジ色の花が混じることもあるそうです。名前の由来が、京都東山七条の耳塚の周りに沢山咲いていたからだそうです。野島崎の草地の群落は殊に見事です。

2014/06/08 龍渉

礼を申し上げます。また、世界稀な真っ正直の選挙制度と、公正な運営を誇りに思っています。▼房州人はあばらが三本足りない、と昔から言われます。最近の雨続きを見ていて、つくづく思うのは、気候は温暖、水害の心配はなし、食べ物に困ったら海や山に行けば、取り敢ずは何とかなるという土地柄では、3本ぐらあばら骨がなくても、暮らしてに困ることがないほどの良い土地だということの証ですね。そう言えば、東北地方から来て堂守になった人たちの過去帳が、お寺にはあります。土地の人たちが費用を出しあってお葬式をしたのです。気候と同じように、人

▼先月号で、みんなで『ふるさと納税』をしましょうと書きました。その後、市長さんとお会いした時、寄付金はとても有難いので、多くの人に寄付してもらおうように工夫しましょう、とおっしゃっていました。▼選挙管理委員を先月退任しました。南房総市になってから2期8年。それ以前の旧白浜町時代も入れると、都合18年余りになるそうです。形だけの委員長であったことは間違いありませんが、有能な事務局さんと、3人の委員さんに支えられて、何とか事故もなく終わることが出来ました。支えてくださった皆様には、心からのお

## 余滴

## につぼん人情小断

三遊亭鳳豊ほうほう

### 第一〇一話 万引きGメン

藤沢市にある社員千人ほどの『イコー保安サービス』という、万引きを防ぐ派遣会社の社員のお話です。社長さんは井崎弘子さんという「わが社は万引きを捕まえる会社ではなく、二度と万引きをさせないのが仕事です」とおっしゃいます。

さて、結婚十年、二人の子供の母親尚子さんは、暴力が治まらない酒乱の夫から子供を守るために泣く泣く離婚しましたが、まず、仕事を探さなければなりません。少しの間なら、母から渡された預金通帳からわずかずつ下ろして生活することはできますが、とにかく収入源を得なければ子供たちの学校の給食費も払えません。せめて、子供たちには、以前と変わりのない暮らしをさせなければと、尚子さんはハローワークに通い続けました。ハローワークから紹介され、電話をかけただけで断られる。ようやく面接まで進んでも、「残念ですが……」と言われ、またハローワークへ。いったい何社受けたでしょうか。十社、二十社ではききません。やはり、何の技術も持たない女が就職できるほど、世の中は甘くありません。人間、何度も何度も断られると、引きこもりになりますね。尚子さんも落ち込みました。

そんなある日のことです。いつもなら、ピアノのお稽古に行っているはずの娘が家で勉強をしています。

「ダメじゃないの、ピアノのレッスンスキぼつちや！」尚子さんがそう言うと、小学五年生の娘はこう言ったのです。

「お母さんが一生懸命仕事を探しているのに、私がピアノを習ってなんかいられないと思つて、先生に断つてきたから」

尚子さんは怒りました。「なに言つてるの、あなたたちには迷惑をかけるわよ。あなたたちはいままで通りでいいんだから」娘は、いくら言つても、頑として言うことをききません。そのうち、下の男の子が泣き出しました。

「お母さん、僕はいつまで我慢をすればいいの？ もう、我慢できそうにもないよー」お姉ちゃんに「いま、うちは大変なんだから我慢するのよ」と言われていたので、子供なりに欲しいものがあつても我慢してきたのに、とうとう我慢ができなくなつたのでしょうか。

そりゃあ、そうですね。まだ小学三年生。友達を持つているおもちゃも欲しいし、ゲームもしたいし、皆が口にするお菓子だつて、きつと食べたかつたでしょう。「ごめんね、欲しいものがあつたら、言うのよ。お母さん、何とかするから」

そうは言つたものの、収入のない尚子さんには何もしてあげられませんでした。そうして、二カ月があつたという間に過ぎ、その年の暮、尚子さんにとっては身も心も寒い十二月がやってきたのです。

その頃、尚子さんは藤沢のハローワークで「イコー保安サービス」という会社が社員を募集していることを知り、早速、面接に向かいました。

「一生懸命働きますので、どうか雇つてください。お願いします。お願いします。」

尚子さんは、面接をしてもらっている部長に、何度も何度もそう言いました。あれほど必死になつたことはそれまでありませんでした。面談に落ち続けて、精神も壊れかけていたのかもしれない。

（子供に、おいしいごはんを思い切り食べさせたい）

その時、尚子さんはそう思つたそうです。離婚してからも、大根の葉っぱが手に入れば、それを細かく刻んでジャコを混ぜて炒め、子供の栄養を考え、これまで一生

懸命、料理もしてきました。どんなに貧しくて、手作りの料理は心のご馳走だと信じてきたからです。

友達の家から冷蔵庫の余りものをもつてきては、子供たちにおかずを必ず毎日二品、作つたといひます。しかし、もう、そのがんばりも限界に近づいてきたのです。だからこそ、この会社には受かりたかつた。子供たちが生きていくためにも。「どうか、お願いします。尚子さんは、最後に立ち上がり、採用担当者にもう一度最敬礼し、お願いします。」

すると、ドアの向こうから常務が入つてきて、尚子さんにこう言つてくれました。「合格だよ、うちで働いて。うちにはね、君のような環境の女性たちがたくさん働いているんだ。安心しなさい。そのかわり、どんなにつらいことがあつても、子供たちのために一生懸命がんばるんだよ」。その場で、「合格！」なんて、夢のようでした。

「じゃあね、今度は正式にうちの社長と会つてもらうからね」

そして、指定された日に、尚子さんは最終的な社長面談をクリアして、晴れて、保安員になることができました。忘れもしない、平成十二年十二月二十五日のことでした。

「明日からがんばります」。そう言つて、部屋を出ようとした時、井崎社長は、尚子さん呼び止めました。「ちょっと待つて。これ、小さいけど、持つてお帰りなさい」。社長が手渡してくれたのは、緑色の地に、キャンドルの模様がちりばめられ、きれいな包装紙に包まれた、クリスマス・ケーキでした。

「今日はクリスマスですよ。子供たちと食べなさい。小さなケーキでごめんね。」胸が熱くなりました。尚子さんは、その日、冬休みで家にいた子供たちに出がけに、「今年のクリスマスはナシだからね」と

断つてきたからです。

家に飛んで帰つたのは言うまでもありません。途中、涙があふれて止まりませんでした。そして、尚子さんは家族三人で、クリスマス・ケーキをいただきます。お母さんに仕事が見つかつたこともあつて、子供たちに久しぶりに笑い声が起りました。

おいしかった……。

いまでもあの夜のケーキの味は、私も子供たちも、一生忘れることはない、と尚子さんは言いました。そして、知らず知らず、涙が出ると言います。あれから子供たちは塾に行くことなく、家で一生懸命勉強し、二人とも県立高校に入学し、やがて、長女は短大を出て保育士になりました。長男は大学の工学部を出て、技術関係の会社で働いています。

そうそう、長男が、井崎社長に大学合格の報告の挨拶にやつてきたそうですよ。その時、彼は社長にこう言つたそうです。

「社長、高林尚子の息子です。ありがとうございます。これからも母親をよろしくお願いします！」つて。

その時、社長はこう思つたそうです。「親の顔が見たいというのは、本当はこういう時に使う諺じゃないだろうか」と。

私は社長を通じて、この話の主人公、高林さんにお会いしてきました。そして、別れ際にこんなことを聞きました。

「え、子供たちへのメッセージですか？ ダメなお母さんを、あなたたちがここまで育ててくれて、ありがとう。苦労かけましたね。」

私がいま生きていられるのは、あなたたちのおかげです。私は、これからも保安員としてがんばつて働かせていただきますから、あなたたちは、もう我慢することとはなく、自由に未来へ向かつて、大きく羽ばたいてくださいな」と話してくれました。